

年間第30主日

第一朗読 シラ 35・15b-17、20-22a

第二朗読 二テモテ 4・6-8、16-18

福音朗読 ルカ 18・9-14

2025.10.26 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

わたしたちは、それぞれ自分の人生を生きていくためには、自分自身は価値ある者なのだという確信、いわゆる自尊感情っていうものが育まれる必要があるとよく言われます。自分自身が生きるに値する、そして価値ある者なんだということが自分の中になれば生きていく力も湧いてこないということは、その通りなんだろうなと思います。

でもこの自尊感情の育み方というのが、神様を信じる人たちと信じていない場合では異なってくるということなんだろうなと思います。

神様ってものを考えなければ、自分がこれだけのことをやってきた、あるいはやっているっていう、自分はよくやっているっていう、そういうことの中に —— 小さいことでもそういうことを見つけて —— 自尊感情を育みましょうって言われたりするわけですが、自分がよくやっているっていうことの中に、でもそれはともすると「他の人よりも」っていう —— 今日のとえ話の中でお祈りする2人の人が出てきましたけど、最初の人、まさに自分はよくやっている、他の人よりもっていう、そういう中でなんとか立とうとしている、そういう感じが伺えます。

でも、神を信じている者にとっては、自分がよくやっているっていうことだけがその価値を確認する1つの基準ではないわけですね。自分って本当にダメだな、自分てなんてダメなんだろうって思うときでも、その自分を受け入れて共にいてくださる神様によって支えられているんだ、だからわたしは自分自身が価値ある者なんだっていう —— 自分がダメなときでも支えてくださる神様によって大切にされている、その思いが自分を支くれる。そういうことなんですね、神を信じることからくる価値とはね。

だから、自分の中にある闇であるとか、至らないこと、罪、変えていかなければならないことを受け入れたとしても、そのことによって自分の価値はなんにも変わらない。

神様を信じてない場合だと、もしかすると、自分が至らないあるいはダメなところがあるんだっていうことを受け入れる、あるいはそこを強調すると、心理的に良くないから目を避けるっていうようなことも起こり得るわけです。

でも、信仰の世界の中で、あんまり罪とかそういうことを言うのは心を暗くするから避けて通ろうっていうようなことが教会の中でもあったとしたら、それは神を信じているとは言えないわけです。

前の前の教皇、ベネディクト16世教皇様の『希望による救い』っていう本がありますけど、その中で、教皇様はこんな言葉を書いておられます。ちょっと読みます。

「わたしたちは自分を偽るような隠れた嘘から自由にならなければなりません。神はこのような嘘を見通されます。自分の罪を認めることができなかつたり、自分が無実であると錯覚していたとしても、それで自分を正当化することはできませんし、それが自分を救うことはありません。

「神が存在しなければ、わたしはこれらの嘘に逃れ場を求めなければなりません。わたしを赦すことができる者が誰もいないからです。誰も真の基準となってくれないからです。

「しかし、神との出会いは、わたしの良心を呼び覚まします。こうして良心は自分を正当化しようとしなくなります。また良心は自分や自分の意見を左右する同時代の人間の反映ではなくなります。良心は、善である方自身に耳を傾けることのできる力となるのです。」

これは祈りについておっしゃってる箇所です。神様の前で自分が罪がないっていうふりをする必要がないし、あるいは気がつかないことがあるかもしれないっていうことを受け入れる、それは決して危険なことではないんだということですね。むしろ、神様がいないければ赦してくれる者がいないから、自分はよくやっているっていうこと

を自分に言い聞かせて立っていかなければならないかもしれないけど、神様がいらっしゃる。

その神様が一人ひとりの至らないこと、間違ったことを赦して、そして改めることができるように共に歩んでくださるんだということを信じるならば、それを通して神に出会い、そして心の中に本当に正しいことは何かっていうその基準を見分けていく、そういうまことの良心が形成されるのだ。何が正しくて何が間違っているのかを見極めるほんとの良心は、自分が間違っているけどでもやり直すことができるっていう希望の中に育まれていく。そういうことなんだと思うんです、教皇様がおっしゃりたいことは。

わたしたちがそれぞれの祈りの中で、自分自身を偽ることなく、「憐れんでください」、そして自分の罪を受け入れる、認めるときさえも、それがただの苦しみではなくて、まさにその時に神様が赦し共に歩んでくださるっていう喜びの源にさえなる。それが神を信じる者の歩みなんだと思い起こす必要があるように思います。

わたしたちが、共に歩んでくださる、まさにありのままのわたしたちを愛してくださる神様に信頼するっていうことは、わたしたちが今のままで何も変わらなくて良いという意味にとってしまったら、それは無神論的な言い方になってしまいます。

ありのままのわたしたちを愛してくださるということは、わたしたちがいかに変わらなくてはならないか、いかに間違っているかを受け入れたとしても、そのことによって一人ひとりの価値が変わることなく、むしろ神との繋がりが深まっていくその入り口になるんだという希望を持ち続けることだと思います。

わたしたちの祈りが、絶えず一人ひとりの心の神様に触れる入り口となり、そして神様の恵みをより受け取ることができるように一人ひとりの心を広げてくれる、そういう祈りでありますように。

そして、その祈りを通して出会う神様を、わたしたちが本当に共にいらっしゃる方として受け取って、共に歩む喜びを、日々、自分ができてるなと思うことにつけても、またできてないなと思うことにつけても、そこに共にいて支えてくださるんだという思いの中で、神様との関係を深めていきたいと思います。